
僕とペットと彼女

歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とペットと彼女

【Nコード】

N4657L

【作者名】

歌音

【あらすじ】

男、高校生、吹奏楽部。

クラブ紹介で見た吹奏楽部に惹かれ幼馴染に誘われて入ることを決意した少年、茅原悠の騒がしく、楽しく、音楽溢れる日常を書き綴った作品

Coda

ここはある郊外にあるホール。

そこで僕は夏だというのに学生服のジャケットを着て舞台の上のホール独特の高そうに見えて実は安い椅子に座っていた。

客席をふと見てみると満席、立ち見までいる。それを見て僕はまた少し冷や汗をかく。

横目でふと咲を見てみる。彼女は　　長い髪の毛を後ろでポニテールに括っている　　客席を凝視して体がガチガチに固まっていた。当然だ。

少し拍手が起こったかと思うと舞台袖から僕たちの指揮者

佐々木太一が笑顔で観客席に頭を下げながら少しずつ指揮台に近づいてくる。部長の小田さんが立ち上がり僕たち全員が立ち上がり、客席に向かって頭を下げる。

さあ、楽しもうじゃないか！

佐々木先生の声が聞こえたような気がした瞬間、僕たちの音は命を得た。

Act act

それは入学式の事。

「道わかる？」

そんな事を言ったのは何故なのだろう

「……………分からないです」怪訝そうな顔をしながら彼女はいつた。

その時から僕の高校生活での運命は決まっていたのかもしれない。

「じゃあ、一緒に行こうよ。僕道分かるからさ。」

ただ最初は友達が欲しくて話しかけたただけだったのだ。

誰だってそうだろう？入学式にやっぱ一人は友達が作りたいもんだ。寂しいし。うん。

彼女は一瞬驚いた表情で僕を見た、そりゃそうだ。見ず知らずの男にいきなり話しかけられるなんてナンパしかないだろう。当然避けるよなあ。

「ああごめん。ナンパじゃないよ。……見える？あそこになんか茶色い髪の毛でポニーテールの子いるでしょ？あれも一緒だから心配しないで。ね？」

するとその少女は少し顔を綻ばせ、

「……一緒に行く」ときこちない笑顔で言った。

それが、僕と咲との出会いだった。

第一章

「悠、そこもつとっぴかり音止めて！」

咲が机の上のメトロノームを止めて叫ぶ。

「なんでもつと曲を表現できないのよバカ！」

もつともだ。僕はもう一度この曲についての表現を考える。今練習している曲は吹奏楽の定番曲、宝島。アボゴのソロから始まる曲でサンバリズムで動く曲だ。サンバというだけポップで踊りたくなる様な曲調で明るいイメージで吹く曲だ。

「悠、いい？この曲はもつと全体的にはつきり吹いて。それから、もつと演奏記号をはつきりつけて。そうしたらそれなりになるから後はやっぱりこういう曲だし楽しく吹きなさい。いいわね？」

僕はもう一度考える。演奏記号。はつきりと吹く。楽しく吹く。この三つを意識した自分の演奏をイメージしてみる。これだけのために今僕は1時間咲に付き合ってもらって練習している

「わかった。もう一回お願い。」

僕は膝に置いていたトランペットを持ち上げ、構える。背筋を伸ばしマウスピースを自分の口につける。咲が真剣な顔に戻って止めていたメトロノームを鳴らし、譜面を見つめる。

僕はメトロノームに合わせて拍を数え、さっきイメージしたように吹こうとする。響くメトロノームを感じてリズムを感じて、さっき自分の中でイメージした様に吹く。咲が今どんな表情をしているのかは分からない。

「ストップ、悠！」

語尾が少し明るくなった咲の声に僕はちょうど次の小節に入る直前の裏で止まった。

「凄くよくなつたよ！聞いてて楽しかった！」

咲は若干顔を綻ばせて言った。その後、ハツとした表情の後にまたやってしまった、という表情が見て取れる。

咲は人に音楽を教えているとき普段からは考えられないような形相で本気で怒るのだが、いつもその後落ち込んでいる。僕的には全然気にしないし寧ろ教えてもらう側からするとそれくらい厳しくしてもらうほうが気合が入ったりする。

「ごめんねゆー君……またやつちゃった……」

ガクンとうなだれた様な　　と言つのをそのまま具体化したような顔つきで咲は言う。

「いやいや全然気にしないでよ。咲が本当は優しいのくらいわかってるしね。」

そういうと咲は少し顔を赤らめて「そ、そんな優しいなんてそ、そんなことないでひゅひょ！」とか一人で騒いで舌をかんでいる。いつものことだけど何なんだろう一体？

「と、とりあえず、今の忘れないようにしっかり練習しようねゆーくん！」とまた笑顔で笑いかける。

そこに隣の教室で練習していた三年生のエレナ先輩がタイミングよく僕らが練習していた教室に入ってきて「終わりましたか？」といつも通りのクールな口調で言う。音が止んだので見に来たのだろう。

「練習熱心なのは素晴らしいですが、一時間そのハイトーンを練習し続けるのは無理、というものですよ。」と相変わらずクールに言う。一見冷たいようにも聞こえるがエレナ先輩は僕を心配してくれているのだ。

とりあえず僕は僕と咲のトランプット2つを持ち、咲が僕の譜面台と自分の譜面台を持って隣の教室に行く。

(後書き)

後書きと言ってもまだ書き終わってないので後書きじゃなかったり・
・
・
・

えー、気を取り直して僕は今高校で吹奏楽部に所属しています。それを理由に吹奏楽部を舞台とした物を書こうと思ひ、書いています。

吹奏楽部に入った理由なのですが・
・
・
・
え？興味ない？知るか(殴

えー、僕は中学時代、簡単な言い方をするとやかましい音楽、ヴィジュアル系やロック系、メロコア、デスメタル、などそういう音楽しか聴かなかくて、吹奏楽なんて子守唄という印象でしかない少年でした。

そう、印象だったのです。

きっと僕以外にもこういう先入観を持っている人はたくさんいると思います。なのに何故僕が今吹奏楽部に入っているかというと、生での吹奏楽というものに触れる機会があり、それに感動したからなのです。

それから僕はクラシックや吹奏楽、声楽や演劇、色々な芸術に自分から触れるようになりました。

なので今吹奏楽などに興味のない方にも是非興味を持って欲しいので、是非こんな稚拙な文章で書かれた物ですが、興味が沸いたお方、聞いてください。

・
・
・
・
大分残念な文章になりましたがこの僕の自己満足の文章をよろしく願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657/>

僕とペットと彼女

2011年1月31日19時49分発行